

第1回Dコンサート「境界を越えて音楽する身体」—開催のご報告とアンケート結果

東京藝術大学大学院音楽研究科リサーチセンター

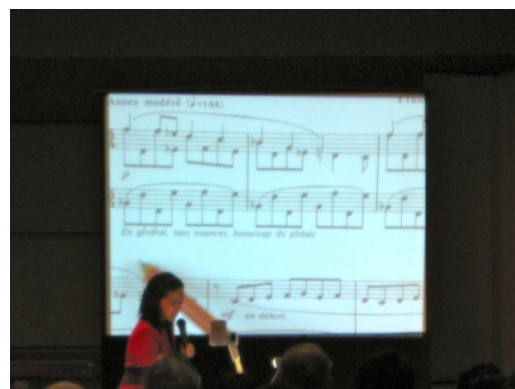
2012年6月11日

昨年度の2012年1月21日(土)に、博士号取得者による新しいタイプの音楽イベント「第1回Dコンサート」を開催いたしました。「境界を越えて音楽する身体」というテーマのもと、4名の博士号取得者が登壇しました。第1部のワークショップでは全体テーマの身体性を巡りつつ、実演を織り交ぜながらそれぞれの研究成果を発表しました。つづく第2部では、第1部の言葉による説明が音楽表現の実践へと転化した場として、また互いの専門領域を交錯しながら新しい表現の可能性を開拓する場として、文字通り「境界を越えて」実演を披露しました。

当日はあいにくの悪天候に見舞われましたが、110名余のお客様がご来場くださいました。第1部の各発表後にそれぞれ熱心な質問をいただいたほか、配布したアンケートには4割以上の方が回答くださるなど、主催者が予想していた以上の反応、ご好評を得ることができました。当日のプログラムは下記のとおりです。

◎第1部 ワークショップ

1. 「F. プーランクのピアノ作品演奏法」
鈴村真貴子 (ピアノ)
2. 「詩の朗読が生み出す歌唱表現」 佐藤容子 (声楽)
3. 「音楽とからだの調和を見つける」 福富祥子 (チェロ)
4. 「日本舞踊独自の表現を探求する」
花柳美輝風 [金子祐木] (日本舞踊)



◎第2部 コラボレーション

5. 瀧廉太郎 《荒城の月》 佐藤 (声楽)、鈴村 (ピアノ)、花柳 (日本舞踊)
6. シューマン 《幻想小曲集》 福富 (チェロ)、福富彩子 (ピアノ)
7. プーランク 《3つの常動曲》 鈴村 (ピアノ)
8. プーランク 《即興曲第13番》《即興曲第15番》 鈴村 (ピアノ)、花柳 (日本舞踊)

—出演者全員によるトーク—

9. 中田章 《早春賦》 佐藤 (声楽)、鈴村 (ピアノ)、福富 (チェロ)、花柳 (日本舞踊)

司会：中村美亜 (音楽研究科リサーチセンター助教)



(ピアノと日本舞踊のコラボレーション)

第2部の途中には、リサーチセンター助教の中村美亜の司会により、出演者全員によるトークがありました。「演奏家は演奏だけを行っていただければいいのではないか、という意見も実際、あるのではないのでしょうか。演奏家にとってなぜ研究論文が必要なのでしょうか？」という中村の質問に対し、「論文執筆では普段、演奏で使っているのとは違う頭の使い方をするので、実際、とても大変ではあるのですが、論文にまとめたことが確実に演奏にフィードバックされていることを実感しています」、「それでもやはり執筆作業ばかりしていると理屈っぽい演奏になってしまっていると感じることがあるので、そういう時は初心の『演奏』に立ち戻る必要があると思います」など、それぞれの経験談で盛り上がりました。



(出演者全員によるトーク)

最後には、全員による《早春賦》を演奏しました。午後2時30分から約3時間にわたる長丁場の会となりましたが、終演後には多くのお客様が客席に残り、熱心にアンケートに回答してくださいました。そこでは、演奏家による研究が即、演奏に結びついたのが分かりやすく、興味深かった、研究の切実さが演奏を通して再確認された、また邦楽とのコラボレーションが新鮮だったのもっと観たいと思った、などという声が多く聞かれました。

その回答の一部を次頁よりご紹介します。

◎アンケート結果

*第1部の研究成果発表では、どういう点が興味深かったですか。

「音楽、芸能に学術的に取り組むというのは想像をするだけで大変だと思うが、皆さん演奏家であるだけに、色々な悩みや疑問点を出発点にして取り組む姿は素晴らしい。感心した」

「普段の演奏会では機会のない、様々な研究発表を聴くことができ、大変興味深かったです。演奏時の体の使い方、姿勢など、大事なことだろうことは判っているつもりでしたが、具体的にお話いただけたのは大変良かったと思います」

「ご自身のジャンルを掘り下げて研究され、まったく勉強もしたことがない私達にもわかる様な発表でした」

「どの発表も、それぞれのご興味が深い所にあり、熱心に研究されていること、素晴らしいと感じました」

「はじめて聞く話でも、その表現活動の面白さ、深さが伝わって面白かったです」

「演奏家の方の、作品に対する想いをどのようにまとめあげてゆくのかのプロセスを知る手がかりになる、貴重なお話でした」

「音楽の全くの素人である私でも、すごく楽しめた発表でした。例えば、文学や経済学、医学の博士課程修了の人が専門の話をレクチャーしてもこれほど興味をもたせる話はできないと思うので、芸大の高い教育レベルにおどろきました」

「それぞれ研究テーマの見つけ方が具体的でおもしろかった。内容もわかりやすかった」

「既成の学問ではなく、自らで学問を作り出す姿勢が素敵です」

*アーティストによる研究発表に引き続き、第2部で実演を聴いて／観ていただきましたが、いかがでしたか。

「ひとつひとつ試みとしても面白いし、作品としてちゃんと成立していたように感じた。研究と実演は矛盾しないと感じた」

「特に日本舞踊を含んだコラボなんて初めて見聴きました。さすが芸大ならではの芸術で、ビデオ・録音をとって配れたら素晴らしいのに。実技と理論の融合に先頭を切って頑張る欲しい」

「プロの方々の表情、表現、気迫を身近で拝見でき、とてもステキな時間を過ごせました。音楽のために論文を書くという考え方がすばらしいと思った」

「4人のアーティストの方の発表が、それぞれ演奏を見たり聴いたりするときのポイントになりました。普段より目の前のパフォーマンスに深くかかわれたと思いました」

「プレゼンテーションと演奏を続けて聴けたので、焦点がわかりやすく、新しい発見や感動がありました」

「プーランクと日本舞踊など、違うジャンルでも違和感なく合っていて面白かった」

「クラシック音楽と日本舞踊の組み合わせがとても面白かった。曲調によって踊りの表情も違い、ストーリー性が見えるようだった」

「こんな愉快的楽しいコラボがあるなんて！若き一流の先生方が、今まで誰も創ったことのないことに挑戦する、その瑞々しい魂とクリエイティブさに感動しました」

***21世紀の芸術活動を担う若いアーティストたちに何を期待しますか。どういう役割を社会で演じてほしいですか。**

「社会が応援しなければと思うが、ぜひ国際貢献活動に活躍の場を拡げてください」

「古い考えにとらわれない柔軟な世界を築いて行ってほしいと思います」

「枠にはまらず、自分の考えや演奏やパフォーマンスを発信しつづけてほしいと思います」

「沈みそうな日本を、浮き上がらせてくれるような音楽で一杯にしてください」

「アーティストと接する「場」が広がっていくと良いと思う」

「日本文化をどんどん外国に発信してほしいです」

「動物的な感性の部分と、理性・学問の部分の「良き通訳」になって下さい」

***その他（同じような試みをぜひ続けてほしいという声が多数寄せられました）。**

「すごく面白かった。感謝します。つづけて下さい」

「今日のコンサートは、例えば朝日カルチャーセンターなどでのとても受講料の高いものに劣らないと思う。ぜひこのような形で続けていっていただきたいです！」

「初めての試みとのことですが、継続されることを希望します」

「定期公演の実現を楽しみにしています」

「今回のような講演会がまた開催されれば、大変よいと思います」

「Dコンサート続けましょう！」

以上